

◎なかやま・みねお 熊本市出身。済々寛高、熊本工業大学卒業。1980年4月、君が淵学園に入り、93年に熊本市立大付属情報技術専門学校校長、熊本市立大付属情報技術専門学校校長、2003年12月から君が淵学園理事長、崇城大学学長、文徳学園理事長。趣味はゴルフ、善母さん(83)、妻(83)、長男、次女と暮らす。



少子化の中、学生確保のため戦略的な経営が求められている私立大学。崇城大の経営を担い、学部・学科や学生への指導の在り方などの見直しを進めてきた中山峰男学長(66)＝学校法人・君が淵学園理事長＝に、今後の経営戦略や大学像などを聞いた。(野田一春)

――義父の中山義孝氏の遺志を受け、大学経営を引き継いで12年になりますね。

熊本大を卒業後、積水化学に就職した。東東工場(滋賀県)で働いていた時、「そろそろ身を固めろ」と父から言われ、中山前学長の長女郷子さんとお見合いし、29歳で結婚。その後、義父から「帰郷して大学に来ないか」と再三誘われ、熱意にはだされて、1980年に転職して大学職員になった。東東では独身寮の寮長や労組幹部を務めた。仕事はやりがいがあり、同僚と楽しい酒を酌み交わしていたので心残りはあったんですが…。

大学職員となってから主に文部科学省との折衝などを任された。2003年、義父が病に倒れた後、名字を「佐々」から「中山」に代え婿養子となり、気持ちも新たに学長になったんです。

――工業系単科大学から5学部10学科の総合大学に移行されましたね。



時代のニーズに合わせる

学長就任前から、若手の教職員らで委員会をつくり、大学の将来構想を議論した。その中で導き出されたのが「生命」「情報」「デザイン」の三つのキーワード。それが、薬学と生物生命、情報、芸術の各学部の設置、学科改組につながったという訳です。

それでも今が「完成形」だとは思っていません。「20年後は弁護士、外科医を含め、現在ある職業の半分近くがなくなる」という米スタンフォード大の研究もあるぐらい、世の中は激動期だ。大学も時代のニーズに合わせてカリキュラムを変化さ



せていかなければ、学生は来てくれません。

――今春、私立大学の46%が入学定員割れするなど少子化の中、大学経営は難しい時代です。

5学部体制になって10年。一部の学部を除き定員割れが続いた。そこで13年度に学部定員を見直し、総数では入学定員割れを解消。今春は在学生全体でも定員を満たしました。

また教員1人が学生5人を入学から卒業まで受け持ち、学業や生活面のサポートをする「チューター制」を導入。実践的な英会話が身に付くよう、英語の授業はネイティブの教員を起用しました。大学は研究機関であると同時に教育機関。教員も研究

自立心ある若者育てたい



ばかりしては通用しない時代だと思います。また、08年から熊本市市民会館へのネーミングライツ(命名権)を得ていることも知名度アップに効果がありましたよ。

――太伯父は済々寛高の創設者・佐々友房。熊本の教育界に縁がありますね。

実父・亀雄と義兄は高校教師、実兄は中学教師という教育一家で、教え子が父たちを慕って家をよく訪ねて来ている。私も憧れて教師になろうとしたが、なぜか父に反対された。縁あって今、教育に携われていることはうれしいですね。

座右の銘は、論語の「有教無類(教えあてたぐいなし)」。「人は出自に関係なく、教育次第でどのような人物にもなりうる」と解釈しています。教育の力で自立心のある若者を育てたい。具体的な取り組みとして、わが大学から起業家を輩出しようと、昨年から起業アイデアの学内コンテストを始めた。熊本に新しい分野の産業を興して米国のシリコンバレーみたいにするのが、私の夢です。

小写真の左は学長室で秘書と談笑する中山学長、中央はインタビューに応える中山学長、右は中央区池田にある崇城大キャンパス

大学概要

●崇城大学 1949年、熊本市九品寺に「電気・電波学校」を私塾として創設。60年に現在地の池田に移転。翌年1月が淵電波工業高(現・文徳高)1を設置。併設の専攻科(高校卒業後の2年課程)が発展する形で、67年に熊本工業大が開学。2000年、芸術学部設置に合わせ崇城大と改称。05年に情報、生物生命、薬の3学部を設置し、現在の5学部体制に。教員数233人。職員数188人。学生数は3489人(いずれも15年5月1日現在)

2010年の熊崎八幡宮秋季例大祭の神幸行列。随員として武者姿で馬に乗る中山峰男学長



憧れの随兵頭「戦国武将の気分」

毎年9月に開催される熊本市中心部の秋の風物詩となっている熊崎八幡宮秋季例大祭。中山峰男学長は2010年から3年間、祭り花形・神幸行列の随兵頭を務めた。子どものころに祭り見物に出掛け、武者姿の随兵頭をカッコいいな!と憧れていた。憧れていたものに近づくことは格別一と中山学長。乗馬の練習をして臨んだ片道2時間の軍中、沿道から拍手を送られたり、写真を撮られたり。まるで戦国武将になった気分だったという。ただ、鏑・かぶとの重さは20kg以上。もう一度打たれたら!との賞問には、「一重にお断りします」と即答した。

私の一枚